

郷土史料に基づく嘉永三年(1850年)の糸島豪雨災害の特徴

九州大学工学部 学生会員 石井隆渥

九州大学大学院工学研究院 正会員 西山浩司 清野聡子 広城吉成

1. はじめに

福岡県糸島市では過去に何度か豪雨災害が起きており、最も大きな被害が出た災害として昭和二十八年(1953年)がよく知られている。さらに過去に遡っていくと嘉永三年(1850年)、大正四年(1915年)にも大きな豪雨災害が起きている歴史がある。しかし、過去の災害が伝承されないまま風化しつつあるのが現状である。実際には、災害の古い記録は、地元の郷土史料や古文書などの紙媒体の中に残っていることが多く、インターネット上には殆ど出てこない。そこで本研究では、郷土史料や江戸時代の災害記録(福岡県近世災異誌)を使って、嘉永三年に現在の糸島市で起こった豪雨災害に着目して当時の被害状況を調査する。

2. 解析方法

本研究では、糸島の郷土史料として、前原町誌、佐波史、二丈町誌、吉井上の心、郷土史浮嶽の里を主に用いた。北部九州の被災地域については福岡県近世災異誌を用いた。以上の資料に基づいて得られた被災箇所をグーグルマップ上にマークした。ここでは、江戸時代の天保国絵図に記載されている村名と現在の神社や公民館などにつけられている名称を判断材料として、当時の被災箇所を推定した。さらに被害の特徴を明らかにするために、QGISで作成したハザードマップと被災箇所を重ね合わせた。

3. 結果

(1) 嘉永三年豪雨災害の規模

災害の規模を把握するため、九州北部と中国地方の郷土史料から嘉永三年の豪雨被害に関する文献を探したところ、図1の地域で被害を確認できた。糸島市を含む北部九州で被害があったが、中国地方まで広げて被害の範囲を確認すると、島根県の浜田市、岡山県の倉敷(西日本豪雨の被害地域と同じ)まで及んでいた。また大分県日田地方でも被害が確

表1 加瀬日記から得られた当時の気象状況

日	時間帯	天候
5月27日	夜～	小ぶりな雨が長い間降る(梅雨)
5月28日	—	同様
5月29日	—	大雨が降る、夜中も同じく
6月1日	明け方	お盆をひっくり返したような大雨
	昼	一旦小降りになる、雨が止むときもある。
	16時	雷雲にできないほどの大雨
	夜	一旦小降り、しかし、連雷再び大雨
	22時	雷鳴が近づく。豪雨
6月2日	24時	雨は中降り、雷は止む
	—	冷気が流入。
	朝	一旦雨は落ち着くがまた大雨。その後降り続ける。
	夜	南西雲発生。大雨になる



図1 嘉永三年豪雨災害の被害箇所(広域)

認されており、広範囲に被害が出ていることがわかる。どの地域も6月1日に大雨となって河川の氾濫や土石流による被害が出ていた。

次に、加瀬日記(博多の諸記録)から当時の気象状況(表1)を調べると、旧暦5月下旬から雨が降り始め、6月1日(新暦7月9日)の朝に非常に強い雨が降って洪水が起きたことが記録されている。その後は断続的に雨が降り続き、6月7日によく天候が回復した。つまり、5月下旬に発生した梅雨前線が6月1日に大雨を降らせ、7日まで北部九州に停滞し続けたことが推測される。

(2) 糸島地方の被害状況

郷土資料、古文書の資料から嘉永三年の豪雨災害の被災箇所を調べると、現在の糸島市東部(高祖山一帯、雷山川と瑞梅寺川の周辺)と西部の加茂川に沿った地区に被害が集中していることがわかった。

糸島市東部(図2)に位置する当時の飯氏村、高祖村、上原村では、高祖山一帯からの土石流による

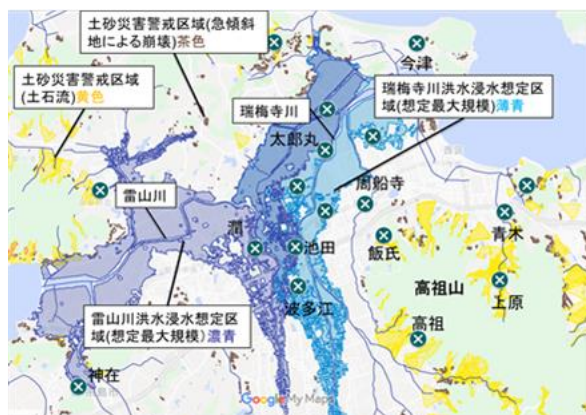


図2 嘉永三年の被災箇所（糸島市東部）



図3 嘉永三年の被災箇所（糸島市西部）



図4 嘉永三年と大正四年の被災箇所（糸島市東部）



図5 嘉永三年と大正四年の被災箇所（糸島市西部）

被害が記録されており、いずれの村も現在の土砂災害警戒区域内に位置することがわかる。また、潤村、池田村、太郎丸村では洪水被害が記録されている。それらの村は、現在の洪水浸水想定区域（最大想定）に入っていることから、瑞梅寺川と雷山川による河川の氾濫が原因であると推測することができる。

一方、糸島市西部（図3）では、加茂川上流域のヒエコバ（小字名）の山崩れを発端として、土石流を伴った河川の氾濫が起り、下流域の佐波村、中流域の堀村、上流域の真名子村などで深刻な被害が出たことが記録され、言い伝えとしても残っている。

(3) 大正四年豪雨災害との比較

嘉永三年豪雨災害から65年後の大正四年（1915年）にも、現在の糸島市全域で豪雨災害が発生した。原因は梅雨前線ではなく、台風に伴った豪雨であった。その事例では、糸島市東部（図4）で瑞梅寺川や雷山川の氾濫に伴って浸水被害が起こっており、嘉永三年豪雨の事例と被災地区が類似していることがわかる。一方、糸島市西部（図5）では、福吉川流域の土石流を伴った河川の氾濫が起きた。災害が発生した流域は異なるが、両事例とも土石流を伴

った河川の氾濫が原因であることは共通している。両事例の被災箇所は、現在作成されているハザードマップに示されている災害の地域性を十分反映していることがわかる。

4. 結論

本研究では、紙媒体として残る郷土史料や江戸時代の災害記録を使って、嘉永三年の豪雨災害に着目し当時の被害状況を調査した。その結果、その豪雨事例の被災箇所は、現在作成されているハザードマップに示されている災害の地域性を十分反映していることがわかった。その事例は、65年後に発生した大正四年の豪雨災害と類似した特徴を持っていた。繰り返し起こる災害の伝承が途絶えることを防ぐため、以上の成果をHPで公表し、地域の学習会や防災教育に反映させていくことが重要である。

謝辞：この研究は、令和2年度の糸島市協定大学等課題解決型研究事業「糸島市の災害史について」に基づいて実施しました。研究遂行にあたり、糸島市役所の関係者に感謝申し上げます。